


けやき

令和3年

11月

さいたま市立 大宮北小学校 学校だより

小さな旅と、大きな経験

校長 渡辺 明

秋が深まってきました。大宮北小のシンボルであるけやきの木が、少しずつ色を変えて、季節の移り変わりを知らせてくれます。緊急事態宣言が解除され、10月2日に行われたブロック別の運動会でも、保護者の皆様に子どもたちの姿を見ていただくことができました。学校も少しずつ日常の活動を取り戻しつつありますが、「ゆるみ」とならないように進めていきたいと思ひます。

校外学習も昨年度は実施できず、2年ぶりとなるものがほとんどです。学校外に出かけて本物を目にして、そこでしかできない体験をする貴重な機会です。実施順に挙げると、10月13日に5年生が環境科学国際センターと SKIP シティ彩の国ビジュアルプラザで、環境と映像制作について学んできました。20日には4年生が水資源の学習のために利根大堰に出かけ、21日には1年生が東武動物公園に初めてのバス移動を経験しました。今後も11月10日に3年生がさいたま市内の施設見学でロッテ浦和工場と見沼くらしっく館、12月3日に6年生が国会議事堂で学習をしてきます。けやき学習室もそれぞれの学年と行動を共にします。(2年生は1学期に茨城県立自然博物館を訪れています)

多くの校外学習中でも、5年生の自然の教室と、6年生の修学旅行は、宿泊を伴う大きな行事です。自然の教室は、さいたま市では体験できない自然環境の中、2泊3日の共同生活を過ごします。今年も10月26日から28日にかけて、自然に包まれての様々な体験ができました。11月4日・5日の修学旅行では日光のホテルに宿泊し、華厳の滝や東照宮を訪れて、日本の文化と歴史を体感します。「同じ釜の飯を食う」という言葉がありますが、子どもたちにとっては家族旅行とは違った経験になります。



「修学旅行」という言葉が初めて使われたのは1887年だそうですが、現在の修学旅行のイメージに近い形になったのは戦後のことです。当時は古美術観光が中心で、専用列車を仕立てて実施することが一般的だったようです。かつては遠方への家族旅行の機会も少なかったため、修学旅行で子どもたちの見聞を広めることが目的でしたが、現在では個々の旅行体験も増えてきていることから、修学旅行の存在意義を問う声もあるようです。

しかし、実際に子どもたちに同行してみると、やはり家族旅行にはない修学旅行の価値を実感します。もちろん学校教育の一環ですから、「対人関係の望ましい態度や習慣を身に付ける」とか「集団生活や公衆道徳について望ましい体験を積む」といった目的があります。ただ、それ以上に、卒業まであと5か月もない時期に仲間と過ごす2日間だからこそ、格別の思い出となるのではないのでしょうか。大宮北小では、多くの児童が同じ中学校へ進学しますが、それでも小学生から中学生になるというのは大きな節目です。「どこへ行くか」に加えて、「だれと行くか」が旅行の大きな要素であることは間違いありません。華厳の滝を見上げて子どもが口にする一言や、日光の自然の中を歩きながら交わす会話など、本当になんでもない、何気ない言葉や表情を見るだけで、突然胸が熱くなる瞬間があります。そこにかげがえのない時間が流れているからです。

就寝時刻になって、「時間だからもう寝なさい」と教員の声がかかるのは修学旅行あるあるの一場面です。もちろん、周囲の迷惑になるような行動は別としますが、この就寝時のひと時に、こっそりと仲間と交わす会話の楽しさは多くの大人の記憶にあるものでしょう。立場上大きな声では言えませんが、そんな秘密のひと時の思い出も、大切にしてほしいと願っています。